

# Analysis on Learning Outcomes from the Internship: Work Experience Internship at Osaka Shoin Women's University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): career education, internship, learning outcomes, factor 作成者: TAKAMATSU, Naoki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4089">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4089</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# インターンシップにおける学習成果の分析 —大阪樟蔭女子大学での就業体験型インターンシップの事例から—

学芸学部 ライフプランニング学科 高松 直紀

**要旨：**本論文は、インターンシップに臨む学生に効果的な支援を行うことを目的とし、本学でのキャリア科目の一環である「就業体験型インターンシップ」において、実習先希望・実習期間・実習満足度・事前目標の条件によって学生のインターンシップでの学習成果の変化に差があるかを明らかにしたものである。本論文では社会人基礎力を参考に作成した「社会で働くために必要な基礎力」のインターンシップ実施前における自己評価の各項目の中央値を基準値と定義づけ、インターンシップ実施後における自己評価を学生のインターンシップでの学習成果と定義づけている。また、学習成果の変化は基準値からの学習成果の変化の度合いで示している。実習先希望・実習期間・実習満足度・事前目標のそれぞれの条件別で学習成果の変化の比較を Kruskal-Wallis 検定・Mann-Whitney 検定を用いて行い、 $p < 0.05$  をもって有意差をありとした。結果として、実習先希望に関しては「主体性」の項目で希望が通った群と通らなかった群においてのみ有意差が認められ、その他では有意差は認められなかった。実習期間に関しては「主体性」「働きかけ力」「創造力」「傾聴力」の項目で有意差が認められ、その他では有意差は認められなかった。実習満足度に関しては全項目で有意差は認められなかった。事前目標に関しては「発信力」の項目で有意差が認められた。

**キーワード：**キャリア教育、インターンシップ、学習成果、要因

## 1. はじめに

大学等におけるインターンシップとは、一般的には、学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度のことである。近年では「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」として幅広くとらえられ、キャリア教育の一環として、インターンシップが積極的に取り入れられている。

大阪樟蔭女子大学（以下、本学とする）のキャリアサポートプログラム、いわゆるキャリア教育におけるキャリア科目のひとつに位置づけられるインターンシップ制度は正課科目として夏期休暇期間の約10日間を活用し、様々な業種の企業や自治体で就業体験を実施する「就業体験型インターンシップ」と、企業を実習先とし、学生が消費者としての視点・女性ならではの視点を活かしながら、企業とともに商品企画・開発を行い、マーケティングにチャレンジする「学生提案型インターンシップ」の2種類のインターンシップを開講し、学生が社会と接しながら大学での学習内容と就業体験を統合し、さらなる学習の契機と方向性をつかむことや自己の職業適性や将来設計について主体的に考えること、社会人として身につけておくべきマナーを知り、それを実践すること、また経済産業省が提唱

する「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」である社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）<sup>1)</sup> を実践できるようになることを目標に学習する機会を設けている。

本論文で取り上げる「就業体験型インターンシップ（以下、インターンシップと示す）」は、本学で2・3・4年生を配当学年とした通年科目である。授業概要について以下の表1に示す。授業の特徴として、学生に目的意識を持ってインターンシップに臨んでもらうことがより効果的な学習成果をもたらすと考え、事前授業の一環としてグループワークを取り入れたインターンシップでの目標設定に取り組ませている。

この度、本学のキャリアサポートプログラムにおけるインターンシップで学生指導を行う際に、希望した実習先への配属が叶わなかった学生から、インターンシップに参加する意味が見出せないと相談を受けた。筆者は希望する実習先ではなくとも、インターンシップに参加することで社会や働くことについて具体的なイメージをつかんだり、自己の適性についての新たな気づきを得たり、専攻分野との関連性を理解したりと、学習できることは多くあると考えている。しかし、学

表1 インターンシップの授業概要

	授業内容
事前授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・概要説明会</li> <li>・ビジネスマナー講習会</li> <li>・事前面談を通して心構え・志望動機の確認</li> <li>・基礎力の自己評価</li> <li>・グループワークによるインターンシップでの目標設定</li> <li>・企業研究とプレゼンテーション資料作成</li> <li>・企業概要とインターンシップにおける目標についての個人プレゼンテーション</li> </ul>
インターンシップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏期休業期間を利用した、10日間前後のインターンシップ</li> </ul>
事後授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎力の自己評価</li> <li>・インターンシップでの学びをまとめたプレゼンテーション資料の作成</li> <li>・インターンシップにおける学びについての個人プレゼンテーション</li> <li>・全体報告会</li> </ul>

(出所) 筆者作成

生の視点では、インターンシップは自分の興味のある仕事の体験ができる、あるいは体験したいという思いが強いためか、自己の希望が通る、通らないによって、インターンシップ参加への意思決定やそれに臨むモチベーションに変化があることも事実である。そこで、インターンシップでの学習成果に実習先希望が影響を与えないことが明らかにできれば、希望する実習先に配属されなかった学生に、当初の希望に沿わない実習先でインターンシップを実施した場合でも学習成果に差はないことを示すことができ、さらなるインターンシップへの参加意欲の向上と学習への動機付けができるのではないかと考えた。また、インターンシップでの学習成果に影響を与える要因を明らかにすることで、今後のインターンシップにおいてもさらに効果的な支援が実施できるのではないかと考えた。本論文をまとめるにあたり、先行研究として「インターンシップ 成果 要因」のキーワードで発表されている研究は存在したが、その内インターンシップの成果と実習先希望の関連性をまとめたものは見当たらなかった。

本論文はインターンシップの実習先について、希望が通った群と希望が通らなかった群、希望がなかった群において、インターンシップでの学習成果に差がないことを調査するとともに、インターンシップでの学習成果に影響を与える要因を明らかにするために、インターンシップでの学習成果と実習期間や実習満足度、

事前目標との関連性を調査することで、キャリア教育の発展に寄与すると考える。

本学ではキャリアサポートプログラムに関連する正課科目において、社会人基礎力を参考に筆者が作成した「社会で働くために必要な基礎力」(表2、以下、基礎力と表す)を用いて学生が各科目の学習開始時と最終授業において自己評価を行い基礎力の伸長度合いを可視化することで大学生活における学習目標の設定などに役立てている。基礎力は社会人基礎力同様、3つの能力と12の能力要素で構成している。本論文では、インターンシップ実施後の基礎力の自己評価の結果を学生のインターンシップでの学習成果と定義づける。

## 2. 方法

### 研究期間)

平成27年4月7日から平成28年9月13日

### 研究対象者)

平成27年度インターンシップを履修した本学学生81名(2年生44名・3年生37名)のうち、研究の同意が得られ、基礎力の自己評価・アンケートが揃っている72名(2年生40名・3年生32名)、対象者には研究参加は個人の自由であること、またアンケートの内容に関しては成績に影響はないことを説明した。

### 研究方法)

インターンシップ前後に実施した基礎力の自己評価と、インターンシップ後に実施したアンケートを照らし合わせ、データを抽出した。インターンシップ前後の基礎力の自己評価・インターンシップ後のアンケートが全て揃ったデータのみを有効とした。有効データ数は72であった。

基礎力は順序尺度であるため、インターンシップ実施前の全員の基礎力の各12項目の中央値をそれぞれの項目の基準値とし、学習成果の変化について、「実習先希望」「実習期間」「実習満足度」「事前目標」の4つの条件それぞれの比較を行った。学習成果の変化は基準値からの学習成果の変化の度合いで示している。

1つ目の実習先希望に関しては「希望が通った群(n=35)」「希望が通らなかった群(n=29)」「希望がなかった群(n=8)」の3群に分類し、基礎力の12項目それぞれに対して、学習成果の変化に有意差があるかについてKruskal-Wallis検定(クラスカル・ウォリス検定)を用いて明らかにした。

2つ目の実習期間に関しては「7日以下の群(n=36)」「8日以上群(n=36)」の2群に分類し、基礎

表2 社会で働くために必要な基礎力

	①主体性			②働きかけ力			③実行力		
	目的意識を持って自分から進んで物事に取り組む			みんなで協力して助け合う			目標を立て、最後まで確実にやりとげる		
アクション	昇	1		1		1			
	2	わからないことも、周囲から指図が指示されれば取り組むことができる。	2	他者が相談してきたときには、それに応えることができる。	2	物事に取り組む際には、まず目標を明確にすることができる。			
	3		3		3				
	4	わからないことは、自ら周囲に指示を仰ぎ、取り組むことができる。	4	困った時には、自ら他者に相談することができる。	4	苦手なことや困難なことでも、目標を定め、一歩踏み出して行動にうつすことができる。			
	5		5		5				
	6	周囲から求められていることや自分の役割を考え、取り組むことができる。	6	普段から他者のことも気にかけており、困っている人には積極的に声をかけられることができる。	6	目標を達成するために、やるべきことを考え、積極的に行動することができる。			
	7		7		7				
	8	周囲から求められていることを先読みし、自発的に取り組むことができる。	8	みんなで協力して助け合える雰囲気づくりややる気を高めるための「やろうよ！頑張ろうよ！」など積極的に声をかけることができる。	8	やると決めたことは苦手なことや困難なことでも、目標達成に向けて粘り強く取り組むことができる。			
	9		9		9				
	降	10	周囲の期待以上のことを、目的意識を持って自発的に取り組むことができる。	10	みんなで協力して助け合えるための具体的な仕組みや環境をつくり、目的に向かって周囲の人を動かしていくことができる。	10	失敗しても自分の行動を振り返り、創意工夫しながら何度でも挑戦し目標に達するまで確実にやり遂げることができる。		
シンキング	④課題発見力			⑤計画力			⑥創造力		
	現状の分析から課題を発見し、解決策を考える			課題解決に向けた効果的な行動計画を組立て、準備する			新しい発想で良い変化を考える		
	昇	1		1		1			
	2	事実を正確に把握するために、情報を集めることができる。	2	課題解決に向けてやるべきことを明らかにすることができる。	2	物事に取り組む際には、好奇心や問題意識を持って情報収集をおこない問題点を明らかにすることができる。			
	3		3		3				
	4	集めた情報を事実と検測に分けて整理し、客観的に課題を把握することができる。	4	課題解決に向けてやるべきことの時間配分を見積もることができる。	4	物事に取り組む際には、明らかにした問題を解決するための一般的な方法を考えることができる。			
	5		5		5				
	6	情報を整理して、順序立てて課題を把握し、課題の背景にある原因を明らかにすることができる。	6	優先順位を考えてやるべきことの順番を決め、課題解決のための行動計画を考えることができる。	6	物事に取り組む際には、すでに確立された方法や考えにとらわれず、柔軟に問題解決の方法を考えることができる。			
	7		7		7				
	8	情報を整理して、課題と原因の関連性を明らかにし「本当にそうなのか？」と背景を深く掘り下げ、課題の本質を見極めることができる。	8	課題解決のための行動計画を複数考えることができる。	8	型にはまらない目新しいアイデアを自由に複数出すことができる。			
9		9		9					
降	10	問題の本質を見極め、現実的かつ具体的な課題解決策を考えることができる。	10	課題解決のために最も良い行動計画を選び、トラブルが起きた時の対処法も考えることができる。	10	物事に取り組む際には、新しい発想から出たアイデアを丁寧に発展させ、目的達成に利用することができる。			
チームワーク	⑦発信力			⑧傾聴力			⑨柔軟性		
	自分の考え・意見をわかりやすく伝える			相手の話を丁寧に聴き、考え・意見を引き出す			他者を受け入れ、自分の考えや行動の幅を広げる		
	昇	1		1		1			
	2	発表の機会が与えられれば、自分の考え・意見を伝えることができる。	2	相手の発言をささげずに最後まで聴くことができる。	2	自分と異なる考えや意見が存在することを理解できる。			
	3		3		3				
	4	自信があることについては、自ら積極的に自分の考え・意見を伝えることができる。	4	適切な顔さ・相づち・表情など聴いていることを伝える姿勢を示し、相手の話しやすい環境をつくることができる。	4	自分と異なる考えや意見について、受け入れる・受け入れないに関わらず、穏やかに最後まで聴くことができる。			
	5		5		5				
	6	表情・声の大きさ・話す速度などを意識し、ボディランゲージや資料などを活用し、他者にわかりやすく発信するための工夫ができる。	6	話しやすい環境のもとで、相手の発言内容を丁寧に受け止め、共感しながら聴くことができる。	6	自分と異なる考えや意見を受けとめ、その背景にある立場や価値観について考えながら、他者を理解しようとする可以尝试。			
	7		7		7				
	8	自分の考え・意見の要点をまとめて、簡潔に伝えることができる。	8	相手の話を要約し、自分の理解と相手の伝えたい内容にズレがないか確認しながら理解を深めることができる。	8	自分と異なる考えや意見、その背景にある立場や価値観を理解しそれを柔軟に受け入れ、自分の考え方や行動の幅を広げることができる。			
9		9		9					
降	10	わかりやすく伝えるために、根拠から結論まで筋道を立てた自分の考え・意見を伝えることができる。	10	話の内容を理解した上で、適切な質問を投げかけ、相手の考え・意見を引き出すことができる。	10	自分と異なる考えや意見、またその背景にある立場や価値観を柔軟に受け入れ、自分の考え方や行動の幅を広げることができる。			
チームワーク	⑩状況把握力			⑪規律性			⑫ストレスコントロール力		
	自分の役割を考えて、周囲に貢献する			社会のルールを守り、社会人としてふさわしく振る舞う			ストレスを感じることに対応する		
	昇	1		1		1			
	2	周囲に期待されている自分の役割を理解できる。	2	授業で知り得た個人情報を漏らさないなど、他者に配慮した行動が実践できる。	2	自分の心身の変化（不調）に早い段階で気づくことができる。			
	3		3		3				
	4	周囲に期待されている自分の役割を行動にうつすことができる。	4	遅刻しない・提出物の期限を守る・私語をつつしむなどの授業で必要最低限守らなければならないルールがわかり、実践できる。	4	自分の心身の変化（不調）に早い段階で気づくことができ、気分転換をはかることができる。			
	5		5		5				
	6	自分のことだけでなく常に周囲の状況にも気を配ることができる。	6	挨拶・言葉遣い・身だしなみなどの社会人としてのマナーが理解できる。	6	心身の変化（不調）の原因について、冷静に考えることができる。			
	7		7		7				
	8	自分と周囲の人の状況（人間関係、忙しさなど）のなかで、自分ができること・他者にできることを考えることができる。	8	挨拶・言葉遣い・身だしなみなどの社会人としてのマナーが確実に実践できる。	8	心身の変化（不調）の原因を客観的に分析し、その困難に对应的適切な対応を判断できる。			
9		9		9					
降	10	自分と周囲の人の状況（人間関係、忙しさなど）のなかで、自分が果たすべき役割を考え実行し、周囲に貢献することができる。	10	社会人として、さまざまな場面で良識やマナーの必要性を理解し、ルールを守り、自らの行動だけでなく、周囲への影響も考えて責任ある規範となる行動をとることができる。	10	常に自分の心身の状態に気を配り、物事を最後までやり遂げるためにあらゆる困難をうまく処理していくことができる。			

(出所) 経済産業省「社会人基礎力」をもとに筆者が作成

力の12項目それぞれに対して、学習成果の変化に有意差があるかを Mann-Whitney 検定 (マン・ホイットニー検定) を用いて明らかにした。3つ目の実習満足度に関しては「不満足群 (n=6)」「満足群 (n=66)」の2群に分類し、基礎力の12項目それぞれに対して、学習成果の変化に有意差があるかを Mann-Whitney

検定 (マン・ホイットニー検定) を用いて明らかにした。4つ目の事前目標に関しては、今回、学生に目的意識を持って、インターンシップに臨んでもらうための支援として、インターンシップ実施前に、基礎力の内容にこだわらず、自由に目標を立案させた。事前に立案した目標から基礎力の項目に当てはめることがで

きるもののみを抽出し、それらの目標がインターンシップの成果に影響を与えているかを明らかにすることを目的としている。学生が事前目標として立案していた「主体性」「実行力」「課題発見力」「発信力」「傾聴力」「状況把握力」「規律性」の基礎力の7項目に対して目標として立案した群と非立案群の2群に分類し、該当する基礎力の項目それぞれの学習成果の変化に有意差があるかをMann-Whitney検定(マン・ホイットニー検定)を用いて明らかにした。「主体性：立案群(n=15)/非立案群(n=57)」「実行力：立案群(n=13)/非立案群(n=59)」「課題発見力：立案群(n=4)/非立案群(n=68)」「発信力：立案群(n=31)/非立案群(n=41)」「傾聴力：立案群(n=30)/非立案群(n=42)」「状況把握力：立案群(n=3)/非立案群(n=69)」「規律性：立案群(n=42)/非立案群(n=30)」Kruskal-Wallis検定(クラスカル・ウォリス検定)、Mann-Whitney検定(マン・ホイットニー検定)ともに、 $p<0.05$ をもって有意差をありとした。

### 3. 結果

実習先希望別の学習成果の変化の比較に関しては、「主体性」の項目で希望が通った群と通らなかった群においてのみ学習成果の変化に有意差が認められ、希望が通った群の方が、主体性が向上した。「主体性」以外の11項目ではそれぞれの群において学習成果の変化に有意差は認められなかった。実習期間別の学習成果の変化の比較に関しては、「主体性」「働きかけ力」「創造力」「傾聴力」の4項目で学習成果の変化に有意差が認められ、「創造力」の項目では7日以下の群の方が、創造力が向上した。また、「主体性」「働きかけ力」「傾聴力」の項目では8日以上の方群がそれぞれの能力要素が向上した。「主体性」「働きかけ力」「創造力」「傾聴力」以外の8項目では有意差は認められなかった。実習満足度別の学習成果の変化の比較に関しては全12項目で有意差は認められなかった。事前目標として取り挙げられていた「主体性」「実行力」「課題発見力」「発信力」「傾聴力」「状況把握力」「規

表3 学習成果の変化の比較(実習先希望別)

社会人基礎力	希望が通った群(n=35)と 希望が通らなかった群(n=29)の比較	希望が通った群(n=35)と 希望がなかった群(n=8)の比較	希望が通らなかった群(n=29)と 希望がなかった群(n=8)の比較
主体性	p=0.003(有意差あり)	p=0.111(有意差なし)	p=0.994(有意差なし)
働きかけ力	p=0.976(有意差なし)	p=0.848(有意差なし)	p=0.782(有意差なし)
実行力	p=0.741(有意差なし)	p=0.607(有意差なし)	p=0.886(有意差なし)
課題発見力	p=0.855(有意差なし)	p=0.662(有意差なし)	p=0.865(有意差なし)
計画力	p=0.949(有意差なし)	p=0.991(有意差なし)	p=0.947(有意差なし)
創造力	p=0.725(有意差なし)	p=0.966(有意差なし)	p=0.749(有意差なし)
発信力	p=0.899(有意差なし)	p=0.140(有意差なし)	p=0.255(有意差なし)
傾聴力	p=0.737(有意差なし)	p=0.968(有意差なし)	p=0.760(有意差なし)
柔軟性	p=0.804(有意差なし)	p=0.137(有意差なし)	p=0.306(有意差なし)
状況把握力	p=0.399(有意差なし)	p=0.668(有意差なし)	p=0.223(有意差なし)
規律性	p=0.851(有意差なし)	p=0.516(有意差なし)	p=0.743(有意差なし)
ストレス コントロール力	p=0.876(有意差なし)	p=0.346(有意差なし)	p=0.542(有意差なし)

表4 学習成果の変化の比較（実習期間別）

社会人基礎力	7日以下の群 (n=36) と 8日以上群 (n=36) の比較
主体性	p=0.000 (有意差あり)
働きかけ力	p=0.010 (有意差あり)
実行力	p=0.073 (有意差なし)
課題発見力	p=0.740 (有意差なし)
計画力	p=0.523 (有意差なし)
創造力	p=0.008 (有意差あり)
発信力	p=0.062 (有意差なし)
傾聴力	p=0.031 (有意差あり)
柔軟性	p=0.342 (有意差なし)
状況把握力	p=0.102 (有意差なし)
規律性	p=0.162 (有意差なし)
ストレスコントロール力	p=0.729 (有意差なし)

表5 学習成果の変化の比較（実習満足度別）

社会人基礎力	不満足群 (n=6) と 満足群 (n=66) の比較
主体性	p=0.319 (有意差なし)
働きかけ力	p=0.485 (有意差なし)
実行力	p=0.101 (有意差なし)
課題発見力	p=0.169 (有意差なし)
計画力	p=0.163 (有意差なし)
創造力	p=0.958 (有意差なし)
発信力	p=0.080 (有意差なし)
傾聴力	p=0.179 (有意差なし)
柔軟性	p=0.694 (有意差なし)
状況把握力	p=0.369 (有意差なし)
規律性	p=0.223 (有意差なし)
ストレスコントロール力	p=0.150 (有意差なし)

律性」の7項目の学習成果の変化の比較に関しては、「発信力」の項目で有意差が認められ、「発信力」の非立案群の方が、発信力が向上した。結果の詳細は以下の表3～6にまとめて示す。

#### 4. 考察

実習先希望別の学習成果の変化の比較で「主体性」の項目において、希望が通った群と通らなかった群でのみ有意差があったことについては、希望が通った群の方が、主体性が向上した。これは学生が希望していない分野での実習であるため、モチベーションが低下したことや、そこでの仕事内容の理解が不足していることから不安を感じ、自ら積極的に行動できなかった

表6 学習成果の変化の比較（事前目標別）

	主体性立案群 (n=15) と 非立案群 (n=57) の比較
主体性	p=0.737 (有意差なし)
	実行力立案群 (n=13) と 非立案群 (n=59) の比較
実行力	p=0.477 (有意差なし)
	課題発見力立案群 (n=4) と 非立案群 (n=68) の比較
課題発見力	p=0.891 (有意差なし)
	発信力立案群 (n=31) と 非立案群 (n=41) の比較
発信力	p=0.013 (有意差あり)
	傾聴力立案群 (n=30) と 非立案群 (n=42) の比較
傾聴力	p=0.108 (有意差なし)
	状況把握力立案群 (n=3) と 非立案群 (n=69) の比較
状況把握力	p=0.797 (有意差なし)
	規律性立案群 (n=42) と 非立案群 (n=30) の比較
規律性	p=0.981 (有意差なし)

背景があるのではないかと考える。今回、実習先希望別の学習成果の変化の比較で「主体性」の項目で結果に違いが表れたが、裏を返せば、「主体性」以外の項目においては学習成果の変化に有意差は認められなかったため、今回の対象者においては希望した実習先への配属が叶わなかった場合においても、「主体性」以外の項目の能力向上が図れると証明されたと言える。

実習期間別の学習成果の変化の比較で「主体性」「働きかけ力」「創造力」「傾聴力」の項目において有意差があったことについては、「創造力」の項目では7日以下の群の方が、創造力が向上した。これは実習期間が短いインターンシップにアイデアを出し合うといったグループワークがあったため、このような結果となった可能性が考えられる。「主体性」「働きかけ力」「傾聴力」の3項目では8日以上群の方が、能力が向上した。これは実習が長期化するほど、仕事内容への理解が深まり、主体的に実習に臨むことができたことで、主体性が向上したのではないかと考える。また、実習が長期化するほど、他のインターンシップ生や実習先のスタッフを巻き込んで実習ができたことで、働きかけ力が向上したのではないかと考える。さらには、実習期間が長期化したことでコミュニケーションをとる機会が多くなり、傾聴力が向上したのではないかと

考える。今回は実習期間のみで学習成果の変化の比較を行ったが、今回の結果より、実習期間に加え、実習内容が学習成果の変化に影響を与えたことが考えられるため、今後は実習内容も合わせて調査することで、より正確な分析ができると考える。

実習満足度別の学習成果の変化の比較より、今回の対象者に関しては、実習満足度は学習成果の変化に影響がなかったことがわかった。このことから、実習の不満足群も、満足群と同様に、実習を通して、学びを得ることができたと言える。今回の調査では、満足・不満足は実習全体を通しての満足度を聞き、その内容に関して自由記載してもらう方法をとった。不満足理由は「実習先環境が悪かった」「自己の遅刻等の素行問題があった」「実習内容が自己の興味のない単調な作業ばかりであった」などが挙げられており、実習先に問題があるものもあれば、学生本人に問題があるものも含まれていたため、今後は学生の満足度に変化を与える要因を考えてアンケートを行うことで、より正確な分析ができると考える。

事前目標別の学習成果の変化の比較では、インターンシップでの目標を事前に立案することで自己目標の達成意識が高まり、目標立案群の方が目標として立案した能力が向上すると予想していた。しかし、結果は、「発信力」の項目では目標非立案群の方が、発信力が向上しており、「発信力」以外の項目においては学習成果の変化に有意差は認められなかった。今回の対象者においては、事前目標は学習成果の変化の度合いに影響を与えなかったと言える。今回、学生には自由に目標を立案させたが、中には何を目標に挙げれば良いかわからないという学生もいた。そんな学生には基礎力を参考に目標を考えるよう指導したが、立案目標の達成方法を実習での行動レベルまで具体化できていなかったため、事前に目標を立案すること、実習での行動が結び付いていなかったのではないかと考える。

今回の研究結果を踏まえて、インターンシップに臨む学生への効果的な支援をまとめると、学生の実習先に関する希望を確認するとともに、実習を通して何を

学びたいかを明らかにする必要があると考える。希望した実習先への配属が叶わなかった学生に対しては、基礎力の「主体性」の項目以外では希望が通った群、通らなかった群で学習成果に差はないことを伝え、興味・関心が低い分野での実習を行うことでも自身の視野が広がり、今後のキャリアを考える際に、選択肢を広げる効果があることを伝え、前向きに実習に臨めるように指導していく必要があると考える。また、実習先の仕事内容を調査し、職業理解を深め、実習までに少しでも仕事内容がイメージできるようにすることも効果があるのではないかと考える。次に、インターンシップの事前目標を立案する際には、インターンシップを通してなりたい自分像をイメージさせ、そのイメージに近づくための具体的な目標を考え、さらにはその目標をどのように評価するのかについても先に考えさせ、可能な限り実習先での行動レベルまで落とし込んだ具体的な行動計画も立案させる必要があると考える。しかし、中には目標を立案することが困難な学生もいると考えられる。そのような学生には引き続き基礎力を参考にさせることも一つの方法であるが、基礎力を参考にさせる際には、基礎力の内容を具体的に反映させた目標を立案させることで、学習成果が高まると考える。今後、これらの方策を用いて、本学でのインターンシップにおいて、学習成果が高まるような支援を実施していきたい。

#### 注

- 1) 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力」  
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>  
(閲覧日 2016年9月9日)

#### 参考文献

- 文部科学省・厚生労働省・経済産業省 (1997) 「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」 (平成 26 年 4 月 8 日一部改正、平成 27 年 12 月 10 日一部改正)

# **Analysis on Learning Outcomes from the Internship: Work Experience Internship at Osaka Shoin Women's University**

Faculty of Liberal Arts, Department of Life Planning  
Naoki TAKAMATSU

## **Abstract**

This article aims to provide effective support to the students challenging the internship and reveals whether the changes in their learning outcomes from the internship differ depending on the various conditions on; preferred training destination, training period, training satisfaction level and prior target; in the “Work experience internship” which is a part of career subjects at the university. In this article, we study “basic skills required to work in society” and define the middle value of each items in self-evaluation conducted before the internship as the standard value and also define the result of self-evaluation after the internship as the learning outcomes from the internship. In addition, changes in the learning outcomes are indicated as the discrepancy between the standard value and the learning outcomes. Kruskal-Wallis test and Mann-Whitney test were used in order to compare the changes in learning outcomes per each different conditions on preferred training destination, training period, training satisfaction level and prior target with a rule that  $p < 0.05$  means it has a significant difference. As a result, with regard to the preferred training destination, a significant difference was seen only between group of which preference was accepted and group of which preference was not accepted in terms of “independence”, and no other significant difference was seen. Significant differences for the training period were seen in items of “independence”, “encouraging skill”, “creativity” and “listening skill”. No other significant difference was acknowledged. All items for training satisfaction level did not indicate any significant difference. In terms of prior target, the item “skills to deliver a message” showed a significant difference.

Keywords: career education, internship, learning outcomes, factor